

[活動報告]

環太平洋研究図書館連合 (PRRLA : Pacific Rim Research Libraries Alliance)

— 2019 年総会参加報告 —

菊地 良直

1. はじめに

2019年9月1日から4日にかけて、環太平洋研究図書館連合（以下「PRRLA」(Pacific Rim Research Libraries Alliance)）の2019年総会が、韓国の高麗大学 (Korea University) を会場に開催された。

PRRLA の総会には館長と随員1名が参加できることから、今年は館長代理として三角太郎情報サービス課長が、随員として筆者が出席した。

PRRLA という組織の概要は過去の報告¹があるので割愛する。本年の総会の概要について既に他所でも報告があるが²、本学からの発表内容等を補いつつあらためてまとめる。

2. 総会の概要

日程とプログラム、発表要旨の詳細は PRRLA2019 のプログラムページで公開している。

PRRLA 総会では、毎年テーマを決めて発表者を募集している。今年度のテーマとサブテーマは以下の通りである。

(メインテーマ)

「パートナーシップとコラボレーションによる図書館の変革」

(サブテーマ)

- ・学内の図書館間パートナーシップとコラボレーション
- ・PRRLA 会員館の間でのコラボ企画
- ・多様な機関に設置された図書館同士で行う先進的な試み
- ・大学図書館間で行う海外協力事例
- ・図書館以外の組織を巻き込んだ働きかけの事例

発表希望者は、上記のサブテーマの一つもしくは複

数を発表内容として選択し応募する。当館からは、前記のうち以下2つのサブテーマを選択し、「東北大学附属図書館の電子化戦略と、歴史的典籍NW事業」と題した発表を申請した。

(選択したサブテーマ)

- ・多様な機関に設置された図書館同士で行う先進的な試み
- ・大学図書館間で行う海外協力事例

当日の大まかなスケジュールと各館の発表タイトルを以下に列記する。当日使用された資料は公開されているので、興味のある方は参照されたい³。

【9月1日(日)】歓迎レセプション

【9月2日(月)】プレゼンテーション



図1 初日の発表会場

第1部テーマ「図書館間連携」

- ・「ロシア極東とハワイの図書館提携：過去と未来」
(ロシア科学アカデミー, ハワイ大学)
- ・「カリフォルニア大学におけるオープンアクセスへの移行推進」
(カリフォルニア大学サンタバーバラ校)
- ・「成功への取り組み：太平洋をまたいだ UCLA 図書館の協力」(カリフォルニア大学ロサンゼルス校)

1 佐々木智穂. 環太平洋研究図書館連合 (PRRLA : Pacific Rim Research Libraries Alliance) —2017 年総会参加報告—, 東北大学附属図書館調査研究室年報, 2018, vol.5, p.153-158
2 三角太郎. E2204 - 環太平洋研究図書館連合 (PRRLA) 2019

年総会<報告>. カレントアウェアネス -E. 2019.12.05, No.381, <https://current.ndl.go.jp/e2204>.
3 2019 Annual Meeting Presentations, <http://pr-rla.org/2019/09/04/2019-annual-meeting-presentations/>

第2部テーマ「キャンパス内連携」

- ・「SMUにおける図書館利用分析」
(シンガポール経営大学)
- ・「キャンパスにおける多様性の促進と受容」
(香港科技大学)

第3部テーマ「図書館・大学を超えた連携」

- ・「電子データの保存：学内課題とネットワーク化による解決」(ヴィクトリア大学)
- ・「東北大学の電子化戦略と、歴史的典籍NW事業との連携」(東北大学)
- ・「隠れた歴史の動態調査：カリフォルニアのコミュニティの歴史を明らかにするための連携」
(南カリフォルニア大学)

【9月3日(火)】

第4部テーマ「学習支援と専門性向上のための連携」

- ・「学生の学び向上のための成功レシピ：HKUSTにおける図書館員と他組織との緊密な協力」
(香港科技大学)
- ・「UCSB図書館におけるソフトウェア&データ・カーペントリーズ」
(カリフォルニア大学サンタバーバラ校)
- ・「明日の図書館とアーカイブのための指導者養成：国内外のパートナーシップ」
(カリフォルニア大学アーバイン校)

第5部 2018年 Karl Lo 賞受賞者の発表とホスト館の発表

- ・「中国映画研究のため Paul Kendel Fonoroff コレクションをリンクトデータとして公開：分散したデータサービスのアーキテクチャー」
(カリフォルニア大学バークレイ校)
- ・「東アジアデータ資源に対する著者名コントロールにおける実践と可能性」(シドニー大学)
- ・「高麗大学はいかに学内に多くを持たず他と資源共有しながら多くを得るか：SICSと「OPEN Library」」(高麗大学)

3. 東北大学の発表

本学からは、「東北大学附属図書館の電子化戦略と、

歴史的典籍NW事業との連携」と題して、電子化戦略における東北大学の課題と、その打開策としてみた国文学研究資料館との事業連携を紹介した。以下に概略を示す。



図2 筆者の発表の様子

本学のデジタルコレクションデータベースで電子公開済の資料を概観すると、公開点数こそ2万8千点に上るものの、実際に研究活用しようとした場合、以下の課題が指摘できる。

- ・電子化時期が2000年前後に集中し、2003年以降はコンテンツがほぼ増えていない。
- ・過去に電子化したコンテンツは、今となつては低解像度のため不鮮明なものが多く、画像のフォーマットも現在では非主流のPDFやGIFが含まれる。

上記の点のほか、たとえば電子化した資料の内訳をみると、和算関係資料が約9千点、狩野文庫絵葉書が1万7千点、漱石自筆資料が7百点となっており、本学が所蔵する資料の分野構成に対し、特定の対象に限られている状況が伺える。

電子化を継続的に推進するうえで必要なのは、予算、現場の電子化知識、公開プラットフォーム、プラットフォーム上のサービス向上などが考えられるが、本学の場合、これらが十分でない状況にある。原因の一端は、国の支援方針の変化と本学の対応にあつたのではないかと考えている。

2000年前後には、大学図書館に対して電子図書館機能の整備と強化が期待され⁴、その追い風のなかでいくつもの電子化プロジェクトが科研費や学内共通経費等により実現した。本学のデジタルコレクション上の電子コンテンツも、ほとんどがこの時期に作られ公開されたものである。しかし2004年の大学法人化前後から、国から各大学への万遍ない予算措置の目配りは終

4 学術審議会・大学図書館における電子図書館の機能の充実・強

化について・1996

わり、各大学が自助努力により事業を継続する方向へ風向きが変化した。それまでの国によるスタートアップ的な支援の後、残念ながら本学は貴重資料の電子化を継続軌道に乗せることができず、今に至るまで低迷することとなってしまった。

この間にも機関リポジトリの充実や震災アーカイブの設置など、他方面での電子化の努力は続いていたが、再び貴重資料を対象に光が当たったのは、歴史的典籍NW事業への参加によってである。

本事業は、正式なプロジェクト名を「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」といい、国文学研究資料館が主体となって行うもので、日本各地の大学に所蔵する古典資料をワンストップで電子公開することを主な柱のひとつとしている⁵。2014年から2023年までの10年間に30万点の資料を電子化し、「新日本古典籍総合データベース」（2017年公開）上で公開することを目標に掲げている。本学を含む国内20大学を拠点大学に位置づけ、海外の18機関とも協力関係にある。

本事業への参加により、今年度までに本学の約1200点ほどの古典資料が電子化された。



図3 新日本古典籍データベース

この事業への電子化の協力方式は大きく3種類となっている。

- (1) 業者撮影
- (2) 内製（館内でスタッフによる撮影）
- (3) 既存画像データの提供

本学ではこれまで業者撮影を中心にコンテンツを増やしてきた。今年度からはさらに、撮影の内製化や、狩野文庫マイクロフィルムをもとに約2万点の資料電

子化を開始するなど、あらゆる選択肢を視野にコンテンツの充実を図る計画である。

4. 見学ツアー

9月2日と3日の両日にわたって、会場となった高麗大学のキャンパスツアーが行われた。新旧入り混じった建物が調和した景観のなか、活発に行き来する学生の姿が印象的であった。



図4 サムソンの寄付により建てられた新棟



図5 予約図書のセルフ受け取り機



図6 閲覧席の予約システム。利用状況を管理



図7 スタジオ設備

5 国文学研究資料館. 本事業について. <https://www.nijl.ac.jp/pages/>

[cijproject/plans.html](https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/plans.html)



図8 キャンパス内の様子。学生によるツアーガイド。

5. おわりに

参加した総会カリキュラムからは、国際的な図書館の動向を身をもって感じる事ができた。

例えばロシアでも学生の学習基盤は電子ブックへと移行しつつあり、コレクション展示をWeb上で行うなど、グローバルな技術にもとづく大学の学習環境の進化が、世界規模で歩調を合わせて進行している様子が窺えた。

一方で、いくつかの電子公開プロジェクトが、地域の歴史や文化を対象としていたことが印象的である。グローバルな先進技術に乗ってローカルなコンテンツが視認化されていく現象は、筆者の部署や発表内容にも連動したもので興味深く思われた。

国内協力と、国外との協力の在り方の違いについても考えさせられた。あくまで筆者の個人的な感想だが、国外との協力の方が、組織的な枠組みより、結局はお互いをつなぐ個人間の信頼や熱意によって内実が支えられているように感じた。本総会の冒頭発表をかぎったロシアとアメリカの大学の数十年にわたる交流事例がその良い例に思われた。

総会期間を通して、常連の参加者が打ち解けて再会を喜ぶ光景を多く目にした。一方で、個人としては初め

での参加発表であり英語力も不十分な筆者に対して、参加大学のどのメンバーも終始温かく根気をもって接していただいた。そこには、筆者個人への気遣いとともに、このコミュニティ自体への愛着を感じるものであった。PRRLAという枠組みの維持発展へ貢献しようとする各人の意識が垣間見えたように思う。

今後も本学から参加を継続する場合は、単なる研修の場との位置づけにとどまらず、より主体的にコミュニティへの貢献を果たす日が来れば、それが今日までの恩返しとなるのではないか。一方で、専門の学位と専門の研究分野を有することが前提となっている他地域のライブラリアンとちがひ、日本の国立大学では図書館員は事務職寄りの人事制度に組み込まれている。人と仕事が短期に変わる日本固有の組織事情や人材育成の考え方もあることから、必ずしも毎回の発表にこだわらず、聴講参加も織り混ぜるなど無理のない範囲で持続可能なスタンスを築く方法もあるかもしれない。

いずれにせよ近年始まったばかりの試みにて、今後の状況を見守りたい。何かの折にでも本報告が役立つことがあれば幸いである。

謝辞：発表資料の内容チェックと英語校正でお世話になった情報サービス課の皆様、館内の関係部署の皆様、この場で御礼を申し上げます。本発表をご許可いただき事前監修いただいた国文学研究資料館様、PRRLA総会実行委員及び素晴らしいホスピタリティを発揮され快適で充実した3日間を提供いただいた会場校の高麗大学のスタッフの皆様、に謝意を表します。

(きくち よしなお、附属図書館
情報サービス課貴重書係)